

「酒の礼法 日本酒の起源から」

民俗学者 神崎 宣武

1. 「お神酒あがらぬ神はなし」

- ・ サケは、サ（齋）+ケ（饌）
- ・ まつりにあわせてつくった酒（現在、新酒製造は43社）
- ・ 神人共食の直会^{なおらい}

2. 直会から礼講（式三献）へ

「宇伎由比は盞結（うきゆひ）にて、女神男神たがひに、御盞をさし交て、今より長しへに心かはらじと、結固め賜ふ契を云ふなり、（中略）今の世までも、萬の事を契り固むるしるしには、盃を差交すことするは、神代よりの風儀（わざ）なりけり」（『古事記伝』）

「祝儀の様體は式三献たるべし、先づ引酒を出し、親三獻飲み子にさす、子三獻のみ納むべし」（『温故新集』）

「出陣の時に、一に打匏、二に勝栗、三に昆布、如是祝ふなり、うち勝よるこぶといふ心なり、（中略）肴喰ひ様、先出陣の時は打あはびを取りて左の手に持ち、ほそき方よりふとき方へ口を付けて、ふとき所をすこし喰切りて上の盃をとりあげ、酒を三度入れさせて呑みて、其の盃は打匏の前辺にも置くべし、さて次にかち栗の真中に有るをとりてくひかきて、なかの盃にて酒三度入れさせのみて、其の盃を前の盃の上におくべし、^{きつ}次次に昆布の有るを取りて、両の端を切りて中をくひ切りて、下の盃にて三度酒を入れさせて呑みて、其の盃を本の所へおくべし、（中略）酒を盃に入れ様は、そゝと二度入れて三度めには多く入るべし、酒嫌ひなる人には呑み残さぬやうに少し入るべし、いつもそと一度入れたらば、くはへて二度参らすべし、以上三度三盃にて三々九度なり」（『軍用記』）

「一こん二こんと云ふを、一盃二盃の事と心得たる人あり、あやまり也、何にても吸物肴などを出だして、盃を出すは一こん也、次に又吸物にても肴にても出だして、盃を出だす是二こん也、何こんも如此也、（中略）古祝儀には必ず式三献、又は三ツ盃出づる也」（『貞丈雑記』）

3. 無礼講と盃の応酬

- ・ 伝統文化とはいえない乾杯の習俗
- ・ 盃の応酬（その習俗の後退）
- ・ 花見にみる伝統と変容